

はじめに

授業実践の理論化と教育実践

校長 川本 治雄

教育実践を記録することは、実践を理論化する第一歩です。実践を振り返り、視点に沿って記録することになります。したがって教育実践の記録は、「授業における事実」をどのように取り上げるかということが課題となりますが、このことは実践記録の作り手からも読み手からも、あまり意識されていません。

今こそ、「大人が明るい未来社会を簡単に描けない今日の社会で、子どもとともに進める教育実践とはどんな実践なのだろうか。」（『教育』NO.744）という問いかけに答える実践の創造が求められています。子どもが授業での学びを通して、人としての育ちや人間らしく生きることを問い続けていく学習や教育活動を記録し、伝えていくことが切望されています。そこには、人の成長していく未来社会の構想や、学習・教育活動の中に埋め込まれ実践されている「事実」を読みとることができるからです。

この紀要に収めた教科や領域における一つひとつの実践は、個性や社会的背景の違いにより、同じように実践してみてもさまざまな結果が出てきます。それでも意味があるのは、「他の人にも共有されるもの」が残ることです。教育実践を読み解く基本姿勢として大切にしなければならないのは、個別の実践を「『実践』すなわち『人間』のもつ共通性と個性の問題」（『教育』NO.756）として把握することです。

さて、日々の取り組みのなかで、実践的指導力を向上させることは、教員の資質を高めることの中心的な課題のひとつです。日常教育実践のなかで大きなウエイトを占めるのは、「授業力」といわれるように、授業内容を具体化する教材研究（教育内容、目標、教材の検討）を進める能力をはじめとして、授業構成能力、授業展開能力、授業評価能力等の諸能力の総合になりますが、こうした能力を高める上で実践を記録し、まとめ、発表する機会をもつことは重要な取り組みとなります。

このような一連の取り組みは、「実践の理論化」と「理論の実践化」の「融合」を意識することによって理論的な枠組み（フレーム）が検討され、実践との「環流」によって理論の具体化が図られ、目の前の子どもの実態に即した「検証」を行うこととなります。このような取り組みの継続のなかで大学教員との「共同研究」についての飛躍的な深化が図られることになるでしょう。

私たちは、「授業の事実」に対して謙虚でありたいと思います。そして、常に学び続ける教師でありたいと考えています。「省察的な教師」といわれるように、日常の教育実践のリフレクションを通して学び続けるしなやかな感性を育てながら、子どもを見つめ、子どもの可能性を引き出し教育実践を展開しなければならないと思います。

この紀要には「学びの質の高まり」というテーマに即して展開した本校の教員が、それぞれの授業論を提起しながら「授業における事実」を記録しています。

みなさまの忌憚のないご批評、ご教示を心からお願い申し上げます。

2010年3月1日